

都市の水辺で安全に水遊び

ガイドブック(指導者編)



このガイドの使い方

水辺の教育にたずさわる皆さんへ

都市には楽しく遊べる水辺がない。そう思っている市民も多いはず。たしかに、治水整備の進んだ都市河川は、切り立った護岸、ゲリラ豪雨による急激な水位上昇など、郊外の川とは大きく異なる危険もあり、知識や経験なく軽い気持ちで水辺に近づけば、事故につながる可能性があります。

しかし良く調べれば、生きものたちが賑やかにくらし、楽しい水遊びや学習もできる場所がきっと見つかります。安全に水辺に近づく拠点を慎重に選び、自然の魅力を確認し、市民団体・NPO・教員・保護者などによる安全サポートに配慮すれば、足元の都市の水辺に、子ども達の自然体験・野外学習の魅力あふれる拠点が開かれてゆきます。

そんな想いを支援するために、私たちはこのガイドを作成しました。このガイドが活用され、大人たちによる頼もしいサポートのもと、都市河川の水辺に子どもたちの歓声が響き、地球大好きな次世代が育ってゆくことを期待したいと思います。

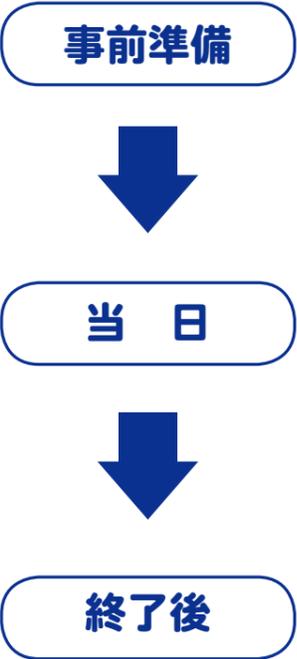
都市の水辺で安全に水遊び
ガイドブック(指導者編)
発行 2016年3月31日

監修: 岸 由二(慶應義塾大学名誉教授)
制作・発行: 網島バリケン島プロジェクト
協力: NPO法人 鶴見川流域ネットワーク
イラスト: 江良美穂
問い合わせ: 亀田佳子 090-3907-2299

河川 公益財団法人河川財団による
基金 河川基金の助成を受けています。

自然体験活動の安全対応

都市の川でも自然が豊かな川と違った危機管理が有ります。十分な注意をすれば、楽しい川遊びができます。裏面に以下の順番で危機管理の紹介をしています。



川で活動するための支援情報

河川活動の支援が欲しいときは・・・

「子どもの水辺サポートセンター」がライフジャケットなど資機材の貸し出しや情報提供、人材育成の支援をしています。

詳しくは <http://www.mizube-support-center.org/top.html>

川で子どもたちを安全に活動させるための講習は・・・

川に学ぶ体験活動協議会 (RAC) が講習会を開いています。安全管理や基本的な指導技術など、川の指導者に必要な技術・知識を「知る」ための基本科目 21 時間を受講すると RAC リーダーとしての修了認定が受けられます。

詳しくは <http://www.rac.gr.jp>



自然・治水・防災を楽しく学べる

鶴見川流域センターに行こう!



・イベントの開催はこちらへ
流域センターからのお知らせ 検索



バク(鶴見川)の流域って何のこと?

鶴見川は東京都町田市を源流として、川崎市・横浜市を通って、横浜市鶴見区から東京湾に注ぐ一級河川です。源流から河口までの長さは、マラソンの距離とほぼ同じ 42.5 km。

流域の面積は 235km²、首都圏のベッドタウンとして市街化率は 85%と開発が進み、195 万人がくらししています。そんな流域の形はななめ後からみた「バクの形」に似ています。

生きものたちは、都市でも、どこでも、自然の単位「流域」がよりどころ!バクの流域にくらす生きものたちを見つけに、この冊子をもって探検にでかけませんか。

流域とは・・・大地に降った雨は必ずどこかの川に流れ込みます。鶴見川に流れ込む大地のひろがりのことを鶴見川流域といい、「流域はバクの形」と子どもから大人まで、親しまれています。



事前準備



①日程の確認

実行の日時を決めます。活動は午前あるいは午後の早めの時間に設定しましょう。午後3時以降は子どもたちが疲れやすいので危険です。

②企画 広報

日程や企画が決まったら、チラシなどを作成し、広報をしましょう。事前申し込みのある場合は受付方法などを考え、事前に名簿などを作成します。

③参加する子どもたちの人数確認

川に入る子どもたちの人数を把握し、支援する大人たちの人数を決定します。実施場所でのシミュレーションもしましょう。

④テーマの確認と指導者の人数の確保

川の遊びや学習会を企画するには、川で安全に活動ができるよう、講習や訓練を受けた指導者の支援が必要です。

- リーダー（子どもたちの支援活動には参加せず、全体の安全をチェック）1名
- 川の中の安全管理担当（上流・下流）2名以上。
- 子どもたちの活動支援（子ども5～10名につき1名程度）。
- その他・・・救急・記録担当など。

⑤場所の下見

現場までの行き帰りや緊急の退去時のためのルート確認。実際に川に入る場所に行ってみましょう。川に入って川底や流れの状況をチェックし、危険な場所や安全な場所をそれぞれ確認します。利用可能なトイレの確認も必須です。

⑥届出

河川敷や河川の中で活動するときや、魚を捕獲する調査の場合に、自治体や漁業組合への届出が必要な場合があります。事前に河川管理者に相談しましょう。当該地域の自治体の代表窓口に問い合わせれば、担当の河川責任者を教えてくれます。

⑦保険

万が一の事故に備えて、必ず保険に加入しましょう。主催者ならびに参加者の障害保険・賠償責任保険をかけます。保険会社や関連NPOなどに相談しましょう。

⑧救急対応

万が一、事故が起き、救急車を呼ぶときに事故現場として、住所確認が必要です。近隣の救急病院などの確認もしておきましょう。イベントの規模や内容に応じて、AEDの用意や救急救命士、看護師を依頼しましょう。体調不良の参加者用の介護場所を用意しましょう。

⑨熱中症対策

初夏から夏にかけては、熱中症対策も重要です。熱中症計を用意し、応急手当用の水などの準備をしましょう。

⑩危険生物事前対策について

都市でも水辺や草地では危険生物や植物が存在するので、注意が必要です。事前準備をしっかりとって、事故が起きないように注意をしましょう。

スズメバチへの対応

- ・基本的に黒い服装は避け、白色系の長袖長ズボン+帽子をかぶりましょう。
- ・香水や整髪料の香りは蜂を刺激します。化粧品も無香料のものを使用しましょう。

・ハチ駆除スプレーを数本用意しましょう。

マムシ・マダニ・セアカゴケグモ・デング熱・棘のある植物などへの対応
・長靴・スパッツ・長ズボン・軍手の着用など腕・足・首など、肌の露出を少なくしましょう。

⑪安全管理（リーダー・スタッフ）に必要なもの

- ライフジャケットは全員着用
- リーダー・スタッフ同士の意思の疎通が図れる携帯電話やトランシーバー
- スローロープ（救助用ロープ）
- 救急セット
- ハチ専用駆除スプレー
- マムシ スズメバチの画像など

⑫天候予測のチェック

事前にインターネット等で天気予報を確認し、雨天対応や実行中止の連絡方法などを決めておきましょう。

○確認が必要な天候等の例

- ・注意報警報（・雷雨や急激な天候変化・異常高温、低温等）
- ・光化学スモッグ注意報
- ・河川の水位 など

⑬保護者への連絡

日程や準備するもの、持ち物の他に、参加するときの服装の案内を保護者に連絡しましょう。また、緊急時の連絡先を聞いておきます。



救急処置にあたってはアレルギーなどもあるので保護者に確認を取りましょう。

保護者のみなさまへ

参加者の服装

水辺などの野外体験の場合



化学繊維の衣服を着る。木綿は乾くまで時間がかかり、体温をうばうので不向き。

森や林での野外体験の場合

こんな場合は参加できません



土の道もあるので雨の後は長靴がGood!



熱があるとき、下痢など体調不良の場合
手足に傷がある場合

終了後

おわりの会（必須）

①事故の有無の確認

②終了後の注意事項

- 戻ったら、手足をよく洗う
- 子どもだけで川に遊びに行かない

③当日の活動をふりかえり成果を共有する

④主催者の終わりのあいさつ

※開始と終了の時間を明確にし、変更がある場合は、参加者に事前に伝え、了解をとります。

⑤保護者に伝える

- 手を洗う
- 休養をとる

⑥記録をとる

手足に付いた汚れをよく洗い流します。



水の中の活動は予想以上に子どもたちの体力を消耗させます。帰宅後は過激な運動はせず安静にして、体を休めるよう指導しましょう。

リーダー・スタッフは今後の活動の充実のために、反省会の実施や活動記録をまとめておきましょう。



急激な天候の変化への対応

天気予報は常にチェックします。しかし、リアルタイムレーダー等で雲の動きをチェックしていても、急激な天候の変化に間に合わないことがあります。最終的にはリーダー自身の経験と直感が頼りです。以下の標語を共有しましょう。



黒雲わいたら黄信号



雷鳴ったら赤信号



橋の下の雨宿りは命とり!

天気情報

地域の天気予報（局番+177）
インターネット：国土交通省のリアルタイムレーダー
<http://www.mlit.go.jp/saigai/bosaijoho/>



当日

はじめの会（必須）

①スタッフ集合

②受付 参加者は名簿に記入
保険対応のため氏名・年齢・住所・緊急連絡先等が必要

③主催者の始まりの挨拶

④スタッフ紹介

⑤セーフティトーク

- スタッフの指示に従う
- 活動の範囲以外のところに行ってはいけない
- 気温の高い日は水分補給に気をつける
- 怪我をしたり体調が悪くなったらすぐに申し出る
- 危険生物の注意



スズメバチ



マムシ



マダニの仲間

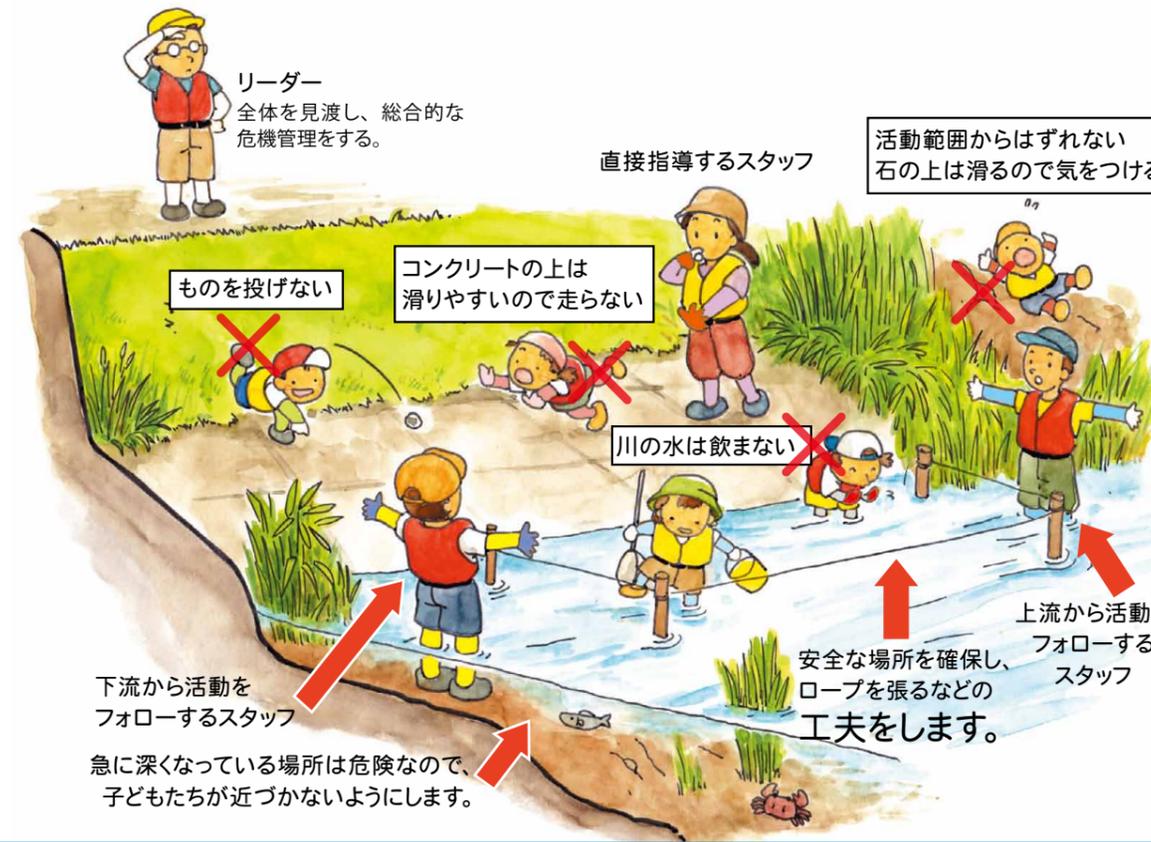


セアカゴケグモ

⑥当日の活動の説明

⑦天候による実施の判断例

- ・晴天時も、全日の雨の影響等で増水している場合は流速（3.6km/h以上）、にごり（透視度60cm以下）を目安とし、現場判断により中止
- ・強風時は、風速6m～7m/sで警戒態勢に入り、10m/s以上で中止
- ・雷注意報が出た場合警戒態勢に入り、周囲に雨雲、雷雲が確認された場合は中止。雲が確認されない場合は、警戒体制を継続しながら実施。



リーダー
全体を見渡し、総合的な危機管理をする。

直接指導するスタッフ

活動範囲からはずれない
石の上は滑るので気をつける

ものを投げない

コンクリートの上は滑りやすいので走らない

川の水は飲まない

下流から活動をフォローするスタッフ

安全な場所を確保し、ロープを張るなどの工夫をします。

上流から活動をフォローするスタッフ

急に深くなっている場所は危険なので、子どもたちが近づかないようにします。